

創世記 第18章20～33節

コロサイの信徒への手紙 第2章6～15節

ルカによる福音書 第11章1～13節

先週4回目のワクチンを接種いたしました。他者に感染させないという意味では間接的な効果ですが、各個人ができる感染対策の一つとして実施してきました。コロナの陽性反応者数が非常に増えていますが、礼拝は、感染対策を徹底しつつ、今まで通り続けたいと思います。

さて、本日の旧約日課「創世記」は、先週の続きです。そして、ソドムとゴモラの滅びについて、アブラハムが、主なる神様に執り成しを願う、主なる神様とアブラハムとの対話のお話です。本日は、この対話から学びます。

聖書日課では省略されていますが、アブラハムを訪れた主のみ使い三人は、「その人たちはそこを立って、ソドムを見下ろす所まで来た」（創18：16）とソドムの近くに向かいます。加えて、「アブラハムも、彼らを見送るために一緒に行った」（創18：16）とありますので、アブラハムも一緒でした。そこから新たな物語が始まります。

その場にいるのは、三人とアブラハムですが、「主は言われた」と、突然主なる神様の言葉が提示されます。聖書日課は、20節からですので、すぐにソドムとゴモラについての話になっていますが、最初に主なる神様は、アブラハムに対する、ご自分の意思を示します。それは、「アブラハムは大きな強い国民になり、世界のすべての国民は彼によって祝福に入る。わたしがアブラハムを選んだのは、彼が息子たちとその子孫に、主の道を守り、主に従って正義を行うよう命じて、主がアブラハムに約束したことを成就するためである」（創18：18-19節）という内容です。

世界のすべての国民が、アブラハムによって祝福に入るとは、なんとも壮大な規模のお話です。アブラハムは、そのために選ばれたのですが、その選びには条件がありました。彼と彼の子孫が、「主の道を守り、主に従って正義を行う」ことです。それは、世界のすべての国民の模範となることを意味しています。そして、それゆえにソドムとゴモラについて話題となったのでした。ソドムとゴモラは、逆の模範であるからです。聖書日課は、そのソドムとゴモラに触れるところから始まります。

「主は言われた。『ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。わたしは降って行き、彼らの行跡が、果たして、わたしに届いた叫びのとおりにかどうか見て確かめよう。』」（創18：20-21）

主なる神様ご自身が、ソドムとゴモラの状況を確認するということですが、

「その人たちは、更にソドムの方へ向かったが」とありますので、実際には三人の人の姿を通してということです。また、「アブラハムはなお、主の御前にいた」とありますから、アブラハムは、主なる神様とともにいたようです。どういう状況か、描写から具体的に想像しにくいのですが、これらの後、本日の聖書日課、対話が続きます。

対話は、アブラハムが進み出て「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか」(創 18:23)と問いかけることから始まります。ソドムとゴモラが罪深いのは分かった上で、もしそこにわずかでも正しい者がいたら、一緒に滅ぼすのですかと問いかけるのです。そして、もし50人罪のない人がいたらと交渉が始まり、最終的に10人でもいたら滅ぼさないということで落ち着きます。

さて、主なる神様が、アブラハムについて、最初に示された事柄は、「アブラハムは大きな強い国民になり」ということでした。この「強い」を意味する言葉は、数的多さによる強さです。その意味で、集団に用いることが多い言葉です。そこから、ここではアブラハムの子孫が、多くなり強くなるということが、前提となっているといえます。

この数が多いこと、それが強さを意味することは、時代や文化を超えて、共通している事柄だと思います。多数決によって何かを決める現代の民主主義においても、多数派は、何かを決められる強さを持っていることとなります。

アブラハムは、このお話において、主の言葉を通して、大きな強い国民になり、その子孫が主の道を守り、主の正義を行うことを予告されました。そして、そのようなアブラハムとソドムとゴモラは、正反対の存在でした。「ソドムとゴモラの罪は非常に重い」からです。そしてアブラハムの言葉から推測すると、ソドムとゴモラは、悪の方が圧倒的多数を占めていたと思われる。多数決の論理から考えれば、ソドムとゴモラを滅ぼすのは、当然の結果でした。しかし、この時、アブラハムがとった行動は、多数決の通りではありませんでした。わずかに存在する正しい者のために、主なる神様に思いとどまるように願ったからです。アブラハムの問いかけにおいて大切なことは、多数決を超えて、主なる神様に願ったということでした。

次に、アブラハムの問いかけが示す、大切な事柄は、正義とそれを行うこととは何かということです。『聖書(旧約)』において、正義とは、主なる神様が命じることであり、またその命令に従うことです。アブラハムが、先ほどの問いかけをしたとき、まだ主なる神様は命令を発していませんでしたが、裁きが行われることは、前提となっていたと思います。その主なる神様の意思に従うことが、正義に他ならないのです。しかし、だからこそ、アブラハムは、主なる神様に問いかけたのです。交渉したのです。

『聖書』が示す主なる神様と人間との関係において、主導権は常に主なる神様にあります。従うのは人間です。人間の願いを叶える神様ではなく、神様の思いに従うのが人間です。それが『聖書』における主なる神様と人間との関係です。しかし、それは、単にどのような命令でも、従わなければならないということではありません。ここが難しいのですが、人間は、自分で考え、自分で判断する理性を、主なる神様に与えられています。この理性によって、人間は神様に背いてしまったりします。あるいは人間同士において、多数となったとき、傲慢となってしまうたりします。しかし、主なる神様が求める関係、人間がそのご意思に従うとは、人間が、その理性を用いて、自発的に主なる神様に問いかけ、その意思を確かめ、そして実行することです。そして、その関係の中で、地上に正義が行われるのです。アブラハムと主なる神様との対話は、そのことを示しているのです。

それでは、交渉次第で、正義は変わるのか、そうではありません。このソドムとゴモラの物語の最後は、本日の聖書日課にはありませんが、それらの滅亡が描かれているからです。悪の滅亡の代表といわれるほど有名な結末ですが、正しい人であった、「ロトの家族」がソドムから離れたから滅亡したのでした。そのようなソドムとゴモラの最後は、第一に主なる神様は、「正しさ」を必ず実行される方であることを示しています。第二に、先ほど、主なる神様の強さは、数の多さではないと申しましたが、少数者がすべてを決定できるわけでもないことを示しています。主なる神様はもとめるのは、「**主の道を守り、主に従って正義を行う**」であって、数の問題ではないからです。

人間は、自分が多数派に属しているときは、その数の多さから正義を主張する場合があります。逆に自分が少数派になったときは、少数意見の反映をと正義を主張する場合があります。人間には、数の事柄を根拠とした、そのような傲慢さがあります。しかし、主なる神様は、そのような人間の傲慢さを超えて、主なる神様の正義を行う、その大切さをこのお話は示しているのです。だから、人間は、主なる神様の意思を確かめることが大切なのです。

このお話の時代設定は、正確にはわかりませんが、今から四千年ぐらい前でしょう。五千年ぐらい前かもしれません。しかし、主なる神様と人間のこの関係は、今日も変わりません。それでは、二一世紀に生きるわたしたちは、どのようにして、主なる神様の意思を確かめるのでしょうか。わたしたちはそれを、イエス様を通して行います。個人的な事柄であっても、集団的な事柄であっても、イエス様を通して行うことが大切なのです。それは、言い換えれば、イエス様を通して、主なる神様とコミュニケーションを取るといいますが、そのコミュニケーションの代表の一つが、祈りです。

もちろん、わたしたちの祈りに主なる神様がすぐ答えてくれるわけではありません。しかし、わたしたちは、祈り続けることを通して、わたしたちが

真に何を求めているから、わたしたち自身の祈りから、悟ることができます。自分が何を願っているか、自分自身が改めて知るからです。そして、そのような中で、主なる神様の意思を知るのです。また、祈る言葉に困ってしまうことがあります。祈ることができないほど、絶望を感じたり、何かを言葉にできないような事態に直面したりすることもあります。そのような、時どうすればよいのか、その答えがイエス様の教えてくださった主の祈りです。そのことが本日の福音書に書かれています。

祈りを行う場所、それはどこでもよいのですが、その代表として存在する場が、教会です。わたしたちの東京聖三一教会もその一つです。多くの人が集まって祈る場所であり、いつでも一人で静かにいることができる場所です。もちろん、一人ひとりが、それぞれの場所で祈ることも大切です。

その祈りは、一般的な「～祈願」と同じでもあります。異なる部分があります。本日の特禱に「永遠にいます全能の神よ、あなたは常にわたしたちたちの祈りに先立って聞き、わたしたちが願うよりも多く与えようとしておられます。どうか豊かな恵みを注ぎ、わたしたちを赦して良心の恐れを除き、あえて願えない良いものを与えてください。み子イエス・キリストのいさおととりなしによってお願いいたします」とある通りです。わたしたちは、主なる神様に信頼して祈るのですが、その信頼とは、わたしたちの願いをかなえてくださることへの信頼ではなく、わたしたちの思いをあらゆる意味を超えて、わたしたちの思いに先立つという意味でも超えて、聞いてくださるという信頼であるからです。そのような信頼を確立してくださるのがイエス様です。そして、そのように祈り歩むことが、主なる神様に従うことです。

イエス様は、主の祈りを教えてくださいましたが、その祈りそのものとは異なるとしても、わたしたちが、教会の中で、人間同士で話し合うことも事柄も、主なる神様とのコミュニケーションにつながると思います。わたしたちは、イエス様を通して、主なる神様に集められているからです。逆に言えば、信じるわたしたちが集まる時、いつもイエス様がともにいてくださるからです。

わたしたちは、これからもイエス様を通して、この世界で「**主の道を守り、主に従って正義を行う**」歩みが行われることを、主なる神様に祈り続けたいと思います。そしてそのイエス様がいつもいてくださることを感じられる場・集いを形成し続けたいと思います。そして、わたしたちの礼拝を通して、交わりを通して、活動を通して、世界に主なる神様の意思を示したいと思います。